

ヨブ記の現代的意義—新弁神論への試論として—(2)問題解決編

伊藤 淳

序

前稿「ヨブ記の現代的意義(1)」においては、ヨブ記における問題設定そのものの中に人生において本当に耐えがたい苦悩に呻吟するものにとっての得難い共感性と慰安があることを明示した。人の苦しみは、その当の苦しみそのもの以上に、自分がいかなる苦しみにあるかを誰にも理解してもらえないときに、真に耐え難いものになるが、ヨブの本当の苦悩も、まったく当人にとって理由なき苦しみに陥ったことのみならず、それをもっとも理解して共感してくれるはずの信仰の友三人が、案に反して情け容赦のない断罪者となることにあったからだ。人生の苦難のさ中にあるときに、ヨブ記の主人公に自分の似姿をみて大いなる慰安を得た人は、数知れないだろう。

しかし、ヨブ記の真骨頂は、その問題設定の絶妙さやヨブの苦悩の卓抜な描写にあるのではなく、その解決にあるのは間違いない。このヨブ記において提出された問い、深淵なる問題設定に対して、真実の解答が与えられたか否か、それが最重要の課題であることは、ある意味で当然のことであろう。

なぜならば、いかに問題そのものを絶妙に仕立て、いわれなき理不尽な苦しみに耐えている多くの善なる人たちにとって大きな共感と慰めにはなったとしても、そこに納得のいく最終的な解答が何も与えられないとするならば、苦悩せる当人たちにとっても信仰ある善男善女たちにとっても一切の希望はなくなり、純粋な信仰や愛を勧める、世界中の様々な宗教で説かれる黄金律も、すべて利己的な動機に歪曲されて、動物性を超えるはずの人間の尊厳は地に堕ちてしまうだろうからである。

上述の問いを弁神論的な問題構図で言い換えると、「神がおられるのに、なぜ不幸や悪がこの地上にあるのか」、「善人の不幸や苦悩にも神意があるのか」という問いに置き換えられるだろうが、それに対する明解な解答がなければ、「神は、存在しないか、あるいは存在しても人間の運命に対しては無力であり、この世界は意味がない」といったニヒリズム的な絶望に陥るしかあるまい。

したがって、ヨブ記で与えられた問いかけにどういう解答が与えられたかは、すべての現代人にとっても他人事ならぬ、切実にして究極的な意義を有する課題である。人類を代表しては地球外の星・月面に降り立ったアプロ宇宙船のアームストロング船長のように、(架空の人物であれ、実在の人であれ) ヨブもまた、人類の希望をかけた大いなる魂実験に挑んだことになると言ってもいいのではないだろうか。以下、ヨブ記の「問題解決」＝解答について探究していく。

1 神とサタンの賭けの勝敗の帰趨

ヨブ記の読者にとっては、自明のことであるが、神の側からすれば、ヨブの苦悩には、大いなる意義がある。神とサタンとの間に取り交わされた賭け、「人間は、本当に一切の利害得失なく、ただ純粋に信仰をもつことができるのか」という賭けに対して、当時考える限りの理想的な信仰者、義人ヨブを被験者にしての人間実験がなされたからである。

もし、この賭けに神が勝てば、人間性と信仰の偉大なる勝利ということになるだろうし、サタンの思惑通りの結果になって、ヨブが神を呪い、信仰を捨てたならば、「純粋な信仰」など現実の人間には不可能であることになり、神の側からの人間性への期待はもろくも崩れ去ることになる。作品たる被造物の不出来は、すなわち創造者たる神の不名誉にほかならず、その意味で神の敗北を意味するだろう。

では、ヨブ記において、この賭けの勝敗は、どちらに帰したのであろうか。ごく表面的に解釈すれば、第一ラウンドは、神の勝利であり、第二ラウンドにおいてはサタンの勝利に終わったようにも見える。全財産を奪われ、子女をすべて失っても、毅然とした態度を示し、神を信じて疑わなかったヨブも、自分の肉体が恐ろしい皮膚病にむしばまれ、塗炭の苦しみに襲われたときに、ついには、深い嘆き悲しみ、激しい絶望に囚われて、神への激しい抗議ともとれる怨嗟の声を上げるからである。「私は、全能者に語りたい。私は神に抗議したいと思うのだ。」(第13章3)文中においてヨブは、神に自らの無実と義しさを激しく訴えて、その不正を難じているように見えるのは間違いないからである。ここにヨブの信仰の崩壊を見ることもできるであろう。しかし、実は、事はそんなに単純ではない。信仰を捨てたのであれば、神への関心そのものを捨て、「世界に意味などない」と観念して、自らの命を断てばいいだけの話である。

しかし、ヨブは、信仰者として神の禁ずる自殺への誘惑を敢然立ちきっているがゆえに自らの生誕の事実そのものを消滅させることを神に祈念しているのである(第3章)¹。実際に、ヨブの妻は、第2回目の試練の際にすでに信仰を否定し、ヨブに棄教を唆し、自殺を勧めている。「あなたは、自分を全きものにしているのですか。神を呪って死んだらいいのに」(第2章9)それに対してヨブは、果敢に言い返す。「お前の言うことは愚かな女の誰かがいいそうなことだ。我々は神から幸いをも受けるのだから、災いをも受けるべきではないのか(同章10)²」と。これは見事なまでの不動なる信仰告白である。信仰の勝利で

¹ 内村鑑三は、ヨブが自分の魂の消滅を願いつつも、自殺の誘惑を断ち切ったことに信仰者と証しを見ている。「極端なる患難に会いしても神を詛わず神を捨てず、神の存在を疑わぬ。ここに彼の信仰の性質の優秀なることを知るのである。」(『ヨブ記講演』岩波書店、2014年、pp.31-32)「彼は、自殺の罪なることを知っていたのである。彼もしこの時自殺せしならば、自信が後の大歓喜に入る能わざりしのみならず、ヨブ記の現れるはずもなく、したがって永久にこれをもって人を慰むることも出来なかったのである。」(同上 p.34)

² 以下、ヨブ記からの引用は、すべて原則『ヨブ記』(関根正雄訳、岩波書店、1979)による。ただし現代的表記になじまない文章は、適宜修正したところもある。

ある。

ここだけで終わっていたら、ヨブ記の最終的解答はとっくに出ているはずである。しかし、その後は、三人の信仰の友が訪れて、慰めんとする。その同情は、七日間言葉を発せないほど深く、親身である。それがゆえにヨブは、神への篤い信仰のもと押さえていた絶望的な心情を吐露するのである。信仰の絆で結ばれた友なれば、「この心の痛みを同苦同非してくれるはず」との熱い期待をこめて。ヨブの願いもそれ以上のものではなかったろう。「君ほどの信仰者であるならば、決して裏で悪いことをしているはずはないから、この苦しみは因果応報の報いとして起こったとは思えない。むしろ何かもっと意味があるはずだ」とそのような共感と信頼の込めた言葉を期待していたのではあるまいか。

しかし、彼らは、ヨブの絶望と怨嗟の言葉を聞いて、そこにヨブの墮落を見た。そこで誠に善意からなるものであるにせよ、激しい断罪の念のこもった説教をたたみかける。その説法にこもった無理解、決めつけ、無慈悲さにヨブの気持ちも逆なでされ、激しく反発し、反論する。その反論の言葉がまた三友にとっては、典型的な棄教者の暴言に聞こえ、むしろ彼の罪を実証したかのように見えたことだろう。「私ではなく、君の口が君を罪ありとし、君の唇が君に向かって反証する。」(第15章6)そこでさらに説法の苛烈さは倍加し、ヨブの反発もいよいよ熾烈化する。こうした悪循環が起こっているのである。

神とサタンとの天上界における賭けを知るよしもない三友からすれば、ヨブの言葉こそその罪の実証になっているが、当のヨブにしてみれば、彼らが指摘するような悪や非人情を犯した自覚はまったくない。身に覚えのないことで断罪されれば、我が身の潔白を強く主張するのは、人情の常であり、誰しも同じ目に会えば、同じ反応をするに違いないだろうから、ヨブの反応を持って無信仰と断罪することができる人がいるはずはない。

したがって、自らの悲運を嘆き、神の不当なる仕打ちに抗議すれども、ヨブは、サタンの思う壺になって、信仰を捨てたのではない。断じて棄教者ではないのである。ヨブの魂の叫びは、額面上どれほど神に反抗しているように見えても、信仰を捨てたゆえのものではなく、むしろ信仰あるがゆえに一層耐えきれないものになっているのである。信仰を捨てれば、むしろ自殺に逃げることもできるであろうし、我が身に起こった厄災を理不尽と難ずることもないだろう。もともと神などおらず、この世界に意味などないのであれば、我が身の不幸は、自然現象と同様単なる不運、偶然の事故にすぎなくなる。ゆえにはるかに耐えやすくなるのである³。

しかし、ヨブは、神への不動の信仰心があるがゆえに、自ら死ぬこともできずに、ひたすら我が魂の消滅を願う。また神の全知全能を信じるがゆえに、自らの不幸を単なる不運とみなさず、そこに神意を感じ取り、神が罪なき我れとわが身を際限なく責めさいなむ、その理不尽さに煩悶し、「なぜ、私がこんな目に合わねばならないのか」と神に抗議せざる

³ 例えば、ユダヤ教ラビのクシュナーは、そのヨブ記解釈の中で、人間に起こる不幸や苦しみをすべて神意であると説明することを厳しく論難している。そのような見方が逆に苦悩する人の苦しみを倍加することが多いというのである。『なぜ私だけが苦しむのか—現代のヨブ記』(岩波書店、2008年)第3章参照。

をえないのである。その見かけ上の“反抗的な態度”をもって不信仰と難ずる友人たちは、人の心の痛みを解さぬ教条主義者と言われてもしかたがないだろう。

では、ヨブの反抗的な態度を差し引いたとしても、彼の信仰には、一点も瑕疵がなかったと言えるであろうか。そこにどうしても信仰上の微妙な論点が生てくる。信仰は、あくまで 100 パーセントを要求するもので、神に対して絶対の服従をもって純粋な信仰者として認定されるという考え方もあるからである⁴。一見すると、神が理不尽なことを命じた時にも、否、そのような時にこそ人間心で「なぜ」と神へと詰問せず、ひたすら従順に神の命に従うことこそまことの信仰者であるという見方もあるだろう。

そのような模範的な信仰者の鏡としてよく挙げられるのがアブラハムである。アブラハムは、神からわが子イサクを生贄として捧げることを命じられた。それに対して彼は、一切の疑問や不満を呈することなく、神の命にただ服従する。

神が命じられた場所に着くと、アブラハムはそこに祭壇を築き、薪を並べ、息子イサクを縛って祭壇の薪の上載せた。そしてアブラハムは、手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした。そのとき、天から主の御使いが、「アブラハム、アブラハム」と呼びかけた。彼が、「はい」と答えると、その御使いは言った。「その子に手を出すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる ものであることが今わかったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、私に捧げることを惜しまなかった。」(創世記 22 章 9-12)

5

まことに壮絶なるまでに従順な信仰である。これを信仰上の美談として語り継ぐことも理解できないこともない。信仰の論理を近代的な合理性で断じてはならず、「不合理なるがゆえに信じる」⁶というところがなければならぬのも理解できる。ヨブには、このような絶対的な従順の精神が欠けていると指摘することもできよう。

ただ、どうしても釈然としない一点が残るのである。それは、このエピソードの意味するところをその通りに解するなら、アブラハムにわが子への「殺意」があったことは自明である。カントの倫理学においても、その結果ではなく、動機において善悪が判定され、新約聖書の福音書においても罪の基準として、その結果ではなく、思いが問われる。「みだらな思いでもって他人の妻を見るものは誰でも、既に心の中でその女を犯したのである。」(マタイによる福音書、第 5 章 27)

もしも、アブラハムの行動規範を現代にあてはめたら、「神が命じたならば、わが子を虐

⁴ 「しかしながらヨブの完全は、神より見ての完全ではない。」(内村鑑三、前掲書 p.20)

⁵ 以下、聖書からの引用はすべて、『聖書 新共同訳』(三省堂、1987、1988) による。

⁶ 中世の護教家テリトゥリアヌス(160 年頃—222 年頃)の有名な言葉。彼は、当時きわめて有力になっていたグノーシス(知識)派に対してキリスト教の教義をすべて哲学的に合理的に基礎づけようとする態度を排撃して、キリスト教信仰の不合理性を強調した。

待しても殺してもかまわない。むしろそれが信仰の証となって褒められる」ということになる。また、ナチスの強制収容所の看守が、ユダヤ人をガス室送りにした看守も、ヒトラー総統の命に従順に従っただけだという論理が成り立てば、本人には罪がないどころか、その姿勢は、アブラハムを模範とする行動規範からすると、むしろ推奨されてしまうことになるだろう。

それでも、神ならぬヒトラー総統には服従してはならず、ヤハウェの神に対しては従順でなければならないと主張するならば、その人は、すでに 100 パーセントの従順ではなく、倫理的な判断を自ら主体的に下していることになるだろう。倫理的な判断が人間に許されるならば、また神の理不尽さへの糾弾も許されるはずである。

また、近代的知性や近代倫理学の立場から旧約聖書の倫理を判定することはできないという批判もあるかもしれない。そういう場合には、旧約聖書の出エジプト記におけるモーセの事例を反証に挙げたい。モーセの導きにより出エジプトを遂げたイスラエルの民が墮落し、十戒に禁じられた偶像である若い牡牛の鑄造を創って、それを神々として拝んでいる姿がヤハウェの神の逆鱗に触れて、モーセに「私は、彼らを滅びつくし、あなたを大いなる民とする」と告げたときに、モーセは神に異論を述べて説得したのである。

モーセは、主なる神をなだめて言った。「主よ、どうしてご自分の民に向かって怒りを燃やされるのですか。あなたが大いなる御力と強い御手をもってエジプトの国から導き出された民ではありませんか。どうしてエジプト人に、『あの神は、悪意をもって彼らを山で殺し、地上から滅ぼし尽くすために導きだした』と言わせてもいいのでしょうか。どうか、燃える怒りをやめ、ご自分の民にくだす災いを思い直してください。どうか、あなたの僕であるアブラハム、イサク、イスラエルを思い出してください。あなたは彼らに自ら誓って、『わたしたちはあなたの子孫を天の星のように増やし、私が与えると約束したこの土地をことごとくあなたの子孫に授け、永久にそれを継がせる』と言われたではありませんか。」主はご自身の民にくだすと告げられた災いを 思い直された。(出エジプト記 32 章 11-14)

神自らが立てた論理や約束をもって神を説得する堂々たる立論である。このようにモーセは、神に対して“議論”しているのであるが、ヨブもまた自らの筋を通して神に論戦を挑んでいるのである。「わたしは神に抗議したいと思うのだ。」(第 13 章 3) それをもって不信心と誹るのは不当であることが、この事例からも明らかであろう。

むしろヨブ記作者の筆遣いは、三友の執拗な神学的論法にも屈せず、神に対してすら堂々と自分の無実を訴え、その釈明を求めるヨブの不撓不屈の精神に大きな意義を見出しているように思われる。

2 ヨブの信仰の勝利から神の勝利へ

はじめの内こそ意気消沈して自らの生命の消滅を願っていたヨブだが、三友との論戦が続くにしがって、その魂の激白はいや増して精彩を帯びてくる。友人たちの論法は、逆に陳腐な繰り返しに堕し、段々その迫力を失っていくが、それに反してヨブの言葉には一種名状しがたいような迫力がみなぎってくるのである。さらに、当初は、友人たちに対してその批判の不当を訴えていたが、その無意味を悟った後は、神へと直接その激しい思いをぶつけるようになるのである。以下、その推移を追ってみよう。

人を見張る者よ、私がどんな罪科をあなたに犯したというのか。
わたしをあなたの的にし、あなたの重荷にされるのか。
何故わが咎を赦さず、わが罪を見過ごしにはされないのか。(第7章20、21)

人が神と争おうと望んでも人は神に千の一も答えることはできなしない。
彼は、心賢く、力強く、誰が彼に挑戦して無傷でありえよう。(第9章3)

たとえ私が正しくとも彼の口が私を罰し、たとえ私が全くとも私を全きものとする。
(同章20)

この辺りまでは、ヨブの神に対する、逆らっても処置なしといった無力感・絶望感に打ちひしがれた感じがあるが、段々に剛毅ある反骨心が頭をもたげていく。

私は、神に申そう。わたしを罪ありとしたもうな。何故に私と争われるかを示したまえ。
あなたがそのみ手をもって造られたものを不当に扱い、これを捨ててしまっているのだ
ろうか。(第10章2、3)

これは、自らへの冷酷な仕打ちが、神の創造の御業の意図に反するという神自身の自家撞着をもって論難せんとする、先述のモーセの説得にも通ずる鋭い論法である。ここには、もはや自己憐憫的な絶望感は影を潜めている。

かたくなにヨブを常套的な応報論と神の全能性をもって断罪する友人たちの議論に対しては、「君たちの常套句は灰の格言だし、君たちの盾の中高は泥でできている」(第13章12)と一蹴し、自らの正義を傲然と宣揚して憚らない。

見よ、私はわが主張を開陳する。
私は、義と判定されるのを知っている。
誰が一体わたしとの議論に勝てようか。

その時はわたしは黙って死んでもいい。(第13章 18—19)

まるで無理解で頑固な友人たちの教条的説教が、ヨブの魂を鍛え上げ、鋼のごとく強靱なものとなしたかのようである。神に対してさえ、自分の義しさを主張して譲らず、自らの議論の土俵に引きずりこまんとするのである。

あなたの掌をわたしから遠ざけてください。

あなたの畏れで私を畏怖させないでください。

あなたが呼んでください。わたしは答えましょう。

あるいはわたしが語り、あなたが返事をしてください。

私の咎と罪とはどの位あるのか、

私の不義と罪を知らせてください。

何故あなたはみ顔を隠し、私の敵とされるのか。(同章 21—24)

ここで注目すべきは、ヨブの神への要求は、自分の義しさを証明せんとすることよりも、神に我が眼前に顕れて、直接そのお心を説明してほしいということにその語調が少しずつ転じてきているということである。すなわち、神を論難することよりも、神との直接の対峙を望んでいるのである。これは、微妙だが、きわめて重要な転位である。

この時にヨブの心境は、一段上昇しているようだ。これはまだ宗教的な無我なる心、神への絶対従順の境地に達しているとは言えないかもしれないが、神に対してことの是非の判定を預けている点で、神への疑念というより信頼と期待が全面に出てきている。逆に言えば、この時点でのヨブの懊悩の中心点は、自らの運命に降りかかった理不尽な運命そのものよりも、神との直接交流が許されてないことに移ってきているのではないか。やがてその痛切なる要望に関して神が直接答えることになる。

結局、ヨブを被験者にしての神とサタンとの賭けは、ヨブが信仰と神への信頼を捨てない限り、断じて神の敗北とは言えないだろう。神への直接抗議が、信仰者としての不遜と不信の誹りを免れないとするならば、前述したとおりに、イスラエルの解放者モーセも非難されてしかるべきだからである。

また、このように本人にとって理不尽極まりない運命の試練に会って、平静心を揺るがさずに、その心境にして微動だにしなかったとするならば、その境地は、もはや人間離れた神人のそれであり、少なくとも「人間の勝利」とは言えないだろう。

前稿で見たとおり、ヨブ記の元となった民間伝承においては、ヨブは、完全無欠の「理想的信仰者」として描かれているが、それはもはや現実には存在しない理念としての作り物にすぎず、したがって神の栄光を示すものであっても、何人の共感を呼ぶものではなかっただろう。

人の痛みを感じない架空の超人、文字通り“鉄の心を持ちたる勇者”が艱難辛苦に一切動ぜず、ストーリー上勝利したからといって、何の意味があるだろうか。やはり人並みの痛みや苦しみを感ずる生身の人間が、時に悲嘆にくれて七転八倒しつつ、苦難を乗り越えて、最後に不動の信仰をつかみ取るプロセスにこそ、人間ドラマの真骨頂があるのであり、彼を創造したる神の勝利もそこにあると言わざるを得ない。

また、最高度の信仰心、宗教精神を持ちながらも悲喜こもごもの人間情念の諸相を知り尽くしたヨブ記作者の天才性もここに極まる。一人の作者の中に純白の信仰者と練達の人間通という通常相容れない二要素が見事に統合されているところにヨブ記の世界文学としての唯一無二の独創性が輝いているのである。

3 仲裁者あるいは贖い主の意義 ―内村鑑三の議論を中心として―

ヨブは、三友との激しい論戦に見切りをつけて、直接神との対面を求めるようになった。その際に特筆すべきは、神と自分の行き違いを調停する仲裁者を心から希求するようになったということである。この仲裁者が本格的に出てくる 16 章から 19 章までがヨブ記中の最大のハイライトであると論じる者もいる⁷。ヨブ記解釈において、この仲裁者の意義をどのように解するかが非常に大きなテーマになっていることは間違いないだろうが、本稿でもこの問題への考察を深めてみたい。

まずは、まだ否定的な文脈においてではあるが、この仲裁者に対する最初の言及は、すでに第 9 章に現れる。

彼はわたしのように人ではないから、彼に答えて
一緒に裁判の臨むこともできない。
わたしたちの間にはわたしたち二人の上に手を置いてくれる
仲裁者はいない。(第 9 章 32-33)

これは、額面通りに読めば、神と自己との断絶を嘆く絶望の言葉ではある。旧約聖書の神学においては、創造主である神と被造物である人間とは、絶対的に隔絶されていて、人間の側から神に裁判を要求するのは僭越の極みということになるが、ヨブもそのことを重々承知しているのである。

しかし、これは、神の理不尽な処遇に対して頭（＝理性）では無理やり納得しつつも、彼の内なる魂の本音において、神と我の架橋をする仲裁者の出現を心底待望する裏返しの表現とも言えるだろう。真実の全知全能の神であるならば、このような非道なことが通る

⁷ 例えば、「神の痛みの神学」で知られる北森嘉蔵は、16 章から 19 章までを富士山の頂上に譬えており、そこにヨブ記の結論があるとしている（『ヨブ記講話』、教文館、2006 年、p.127）。

はずはない、そのような心の声が聞こえてこないだろうか⁸。

この声は、最初には絶望の諦観だったものが、自らの義しさを神へと取り次いでくれる仲裁者を求める、より積極的な魂の声となる。ヨブ記中この「仲裁者」が本格的に登場するのは、以下の箇所である。

大地よ、わが血を蔽うな、
わが叫びは墓にくだるな。
わが保証となる者高き所にあり、
わが想いを神に取り次ぐ者、
わが眼は神を仰いで涙を注ぐ。
願わくは彼、神に対して人のために弁じ
人の子とその友の間に立たんことを。
何故ならもう長いことでもない、
わたしは帰らぬ旅路につくのだから。(第 16 章 19—22)

まるで血を吐くような裂帛、痛切な魂魄の叫びである。それまで自分の存在の消滅を自嘲的に希望することの多かったヨブは、今生の命がまさに尽きんとする前に自らの叫びを「墓にくだるな」と天に届かんばかりに訴え、自らの想いを神へと取り次ぐ保証人、仲裁者の出現を切望している。

上述の通り、これはまさに神となんとしても意志の疎通を図りたいという切なる願いである。神に自らの想いが届けば、死して尚本望であるという生死をかけた熱情の迸りである。さらに 19 章においては、その渾身の願いが、魂の確信にまで昇華されてくる。

願わくはわが言葉の書きつけられるように
願わくは銅板に彫り刻まれるように。
鉄の筆をもって鉛板に刻まれ、
証拠として岩にほりつけられるように。
しかり、私は知る、わが贖い主は生きたもう。
最後に彼は塵の上に立たれるだろう。
かくも打たれたわが皮を去り、
わが肉を離れてわたしは神を見るだろう (第 19 章 23—26)。

⁸ 内村鑑三は、この仲裁者を求める魂の願いに神人隔絶の旧約聖書を画する、人類普遍の意義を見出している。「ヨブのこの叫びは、神の探究におのずと伴う仲保要求の最初の声である。旧新約全体においてこれ以前においてこの声はないのである。その声は短くかつ微かである。しかし人の本性より出ずる重大なる叫びである。人の心の深みより生まるる人類本具の叫びである。」(『ヨブ記講演』、岩波書店、2014 年、p.75)

この引用箇所こそヨブ記最大の核心部であり、ここにおいてヨブの悟りが最高潮に高まったと断定する論者があるのも道理である⁹。まずは、身に覚えのない罪で友人たちから断罪され続けたヨブは、我が身の潔白を全身全霊で訴える。

この感じは、一度でも無実の罪で裁かれたことのある者であれば、身に染みてわかるだろう。周囲の人たちは、自分を有罪と確信しているので、何を言っても、すべては虚言として受け止められる。あまつさえ、ヨブの三友のごとく「明々白々たる罪状を素直に白状し、天に謝罪すれば、情状酌量の余地もあるだろうに頑なにしらを切る不遜な態度を取り続けるがゆえに、お前はさらに罪を深めているのだ」と論難されたら、たまたらずに、何度否定されようと「わが言葉に断じて一片の嘘偽りなし、むしろこの言葉を決して消えない文字で永遠に遺そう」と願うものではないだろうか。ヨブの血を吐くような言霊のすさまじさには、そうした“冤罪の人”特有の痛切なる心情を語って余りある。

しかし、この場合にヨブを冤罪で貶めようとするのは、信仰の友人たちだけではない。友に裏切られたとしても、最終的には神が自分の無実をわかってくれると思えるならば、つまり天上界にある全知全能の神を最後の拠り所にすることができれば、ヨブの心もどれほどか慰められ、救われたたことだろうか。しかし、自分を断罪するのが、神ご本人ということであれば、もはや最後の退路も断たれて一切の救いはなくなる。

また、ヨブの無実さえ見通せない「神」であれば、全知全能の名に値せず、信じる必要がないと（ヨブの妻のごとくに）見切りをつけて、信仰を捨てたならば、彼の不幸はどれほどか安らいだことであろう。棄教者であれば、自らの生命を断つという「逃げ道」も許されるだろうし、絶望はあっても、やりきれない理不尽感にもがき苦しむことはなくなるはずだ。

ヨブの最大の苦悩は、一方で神への篤い信仰を捨てずに、他方においてその神に手ひどく裏切られたという絶対的な矛盾葛藤の内に置かれたことにある。まさに一切の退路を断たれた、抜き差しならぬ限界状況である。いわば、神を信じつつ、同時に神への不信に責め苛まれるディレンマである。

このような絶対矛盾的ディレンマ状況から自らの魂の声とその義しさを神へと釈明してくれる仲裁者＝「わが想いを神に取り次ぐ者」＝「贖い主」の存在が必然的に要請せざるをえなくなるのである。「しかり、私は知る、わが贖い主は生きたもう。最後に彼は塵の上に立たれるだろう。」

では、この「贖い主」とは、一体いかなる存在であり、その意義をどのように解釈すればいいのだろうか。ここがヨブ記解釈における最重要の心臓部であり、諸家の議論が発熱・

⁹ 例えば、内村鑑三は、「その時忽焉として、二十五―二十七節の大思想が彼に光のごとく臨んだ。後世に訴える要なし、我の弁護者、我の証者、我の友は今天に在理との新光明が、今この世においてまた人の中において道窮まりたる彼に臨んだのである」と云っている。（前掲書 p.140）

沸騰し、諸説紛糾する最重要論点である¹⁰。以下、その膨大な諸解釈の中からもっとも代表的で傑出した説の一つとして内村鑑三の議論を中心に論点整理を試みよう。

まずは、内村鑑三に限らず、この章句に過剰なまでの神学的な意味を深読みをするのは、代表的なキリスト者たちによる解釈である。中世最大のキリスト教神学者トマス・アキナスは、この贖い主を次のように解している。

ヨブがこれほどの慎重さをもって待たれることを欲したこの話は何であるかを示して、「というのも、わたしはわたしを贖う方が生きておられることを知っているからである」と続けている。ヨブはこのことを明瞭に理由の形で示している。—中略—ここで考察すべきは、「一人の人間によって罪がこの世に入り、罪によって死が入りこんだ」（ロマ 5, 2）と言われるように、不死なる者として神によって造られた人間が罪によって死に陥ったが、人類はキリストによってこの罪から贖われた—このことをヨブは信仰の霊によってあらかじめ知っていた—ということである。キリストはわれわれのために死ぬことによってわれわれを罪から贖った¹¹。

キリスト教神学の立場からは、旧約聖書を解するに新約の立場から逆照射し、そこに「人類の罪の贖い主」＝イエスの前身を見るのは、宗教的な正統解釈として当然であり、そう見ることは布教上も大きな意義を有することであろう。

ただ、ヨブ記の「贖い主」を端的に「人類の罪を贖う主」という意味でイエスと同一視するのは一点無理がある。ヨブ記研究をライフワークとした牧師浅野順一の指摘するごとく、「ヨブは、未だ自己の罪を自認するに至っていないのだから、贖う者が彼の罪から彼を贖い出すという解釈はあてはまらない。彼が直面している死から救い出す者という意味は一応考えられるけれども、彼は生きるよりも死を望んでいることはいままでしばしば繰り返されたところである¹²」からである。

それに対して、我が国近代の最大のキリスト者内村鑑三は、異常なほどにこの「贖い主」のくだりを高く称揚して、トマス同様にそこにキリストの前身を見ているが、それを「人類の罪の贖い主」ではなく、「私の弁護者（我を義なりと証して私の汚名をそそいでくれる者）」という意味に解釈している。

この者が今活きている事を我は知る—我は確信する—というのである。彼は存在しているのみならず、今活きて活動しており、私の味方たり、我が正義の保護者であるというのである。これ実に暗中より探り出したる、光まばゆき信仰の珠玉である。そして、「後

¹⁰ 「この章句の種々の困難は、過剰なほどの解釈と修正を生んだ。」ロバート・ゴルディス『神と人間の書—ヨブ記の研究—（上）』、教文館、1977年、p.225

¹¹ 『トマス・アキナス「ヨブ記註解」』、知泉書院、2016年、p.332-3

¹² 『ヨブ記註解Ⅱ』、創文社、1968年、p.150

の日に彼必ず地の上に立たん」とは、この弁護者が他日地上に出現するとの予感である¹³。

まさしくヨブ記の中にキリスト降臨の予告を見ているのである。内村鑑三の解するところのイエス・キリストは、何より損なわれた「我が正義の保護者」である。それゆえに、イエスを知り、新約の信仰を持ちたるものは、いかなる艱難辛苦や無理解、迫害をもものとししないのである。内村は、聖パウロの不屈の信仰態度とヨブの懊悩を比較して、次のように語る。

日々死に面するが如き迫害にありて生命と勇氣に自由に充実している心理状態は、実に驚嘆に値するものではないか。これをヨブの哀哭と比して霄壤（しょうじょう）の差ありというべきである。しかしこの理由をもってヨブを貶することは出来ない。この大いなる差異は、キリストを知ると知らぬに起因するのである。キリスト降臨以後に生まれしパウロはキリストを知らざるゆえにかの大安心あり、キリスト降臨以前に生まれしヨブはいまだキリストを知らぬがゆえにこの大哀哭があつたのである。そしてこのキリストを暗中に創作せんとするがすなわちヨブの苦闘史である¹⁴。

ひとり「贖い主」の意義を明かすのみならず、ヨブ記全体を「キリスト出現以前のキリスト探究史」として意義づける、内村の論旨には、一点の曇りなく、首尾一貫してキリスト教護教の論陣を張る様には実に瞠目すべきものがある。

ただ、前稿、(1)問題設定編で見た通り、もう一段キリスト教教義を超えた宗教哲学の立場に立てば、そこには普遍宗教的意義を見て取ることもできるのではないか。内村自身も、この正義の証人としての「贖い主」を希求する心情、すなわち救世主降臨待望論を人類普遍の心願としてとらえている。

ヨブは己の義を証するもの地上に一人もなきを悟りて、遂に神においてこれを求めるのをに至ったのである。すなわち彼は心の自然の動きに迫われて、贖い主の信念にまで達したのである。彼に限らず何人にとっても彼の場合に立ちて、光明探究の心を棄てずば終にここに至るのである。これを特殊天啓とみずとも人間自然の要求とみれば少しも怪しむを要しない。今日キリスト者の中に再臨復活をの信仰を喜びを受くるのも多きは、それがわが本来の要求に合致することである。信者は神学を求めず、信条（ドグマ）を要せず、ただ魂の中におのずと湧き出ずるものにして同時に天父より啓示さるるものを求める。すなわち己の要求と上よりの啓示を相合致せし所の真理を愛するのである¹⁵。

¹³ 内村鑑三、前掲書 p.140

¹⁴ 前掲書 p.35

¹⁵ 前掲書 p.142

ここに来て、内村の宗教思想は、表向きキリスト教護教家としての体裁は堅持しつつも、その内実において、人類普遍の宗教精神に即して語っているのは明らかであろう。すなわち、この「贖い主の信念」は、「人間自然の要求」であるならば、決してキリスト教的文脈においてのみ考えられるのではなく、「再臨復活」への希求は、決して歴史上現れた、固有名詞としての「イエス・キリスト」のみに限定されるのではなく、どのような宗教信条を持つ者であっても通用する全人類共通の普遍的な要求ということになる。

当の内村自身は、キリスト者としての信念にかけてそのような解釈は否定するであろうが、このように解することは、決して彼の宗教思想を貶めることにならずして、かえってその「キリスト」再臨待望論が、むしろ他宗の信仰者にも共有しうる、普遍宗教的意義を有していることを称揚することにならないだろうか。

一見すると、狭義のキリスト者の立場に立たず、旧約の神ヤハウェの理不尽さに人間的な反発を辞さない心理学者ユングもまたこの仲裁者（仲保者）としてのキリストの普遍的な役割を意味づけて「キリストは、二重の意味での仲保者である。彼は神と人間という結合しがたい二つの両極の間に重要な中間の位置を占める¹⁶」と述べているが、ここでいう「キリスト」は、歴史上の人物としてよりも、彼が心理学的に普遍化した理念的なキャラクターであると言っているだろう。

イスラム信者にとっては、全知全能の神アラーと人類を仲介し、人間の正義を神へと伝える「贖い主」は、最終預言者モハンマドに他ならないだろうし、仏教であれば、法華経で謳われる久遠実成の仏陀、法身の教えを応身として現れた釈尊が地上の人間に架橋していると言ってもよいだろう。また、日本神道であれば、現人神としての天皇が、高天原の最高神・天照大神の肉体祖先として天地をつなぐ仲介者の役割を担っていると言えるかもしれない。

このように普遍宗教哲学的な観点に立って考察すると、ヨブの「贖い主」への希求は、人類共通の普遍的宗教心情の発露ということになる。特定の宗教的文脈から離れて、それを普通の言葉で翻訳すると、「全宇宙をつかさどる全知全能の神があって、この宇宙においては本当は不合理なことは何も起こらない。一見すると、非の打ちどころのない善人が理不尽な不幸に見舞われ、悪人が栄えるように見えても必ずその善人の正義を贖う存在があって、最後は報われるのだ」という信念になるだろう。

このように考えると、この「贖い主」を神、仏、キリストその他特定の神名で呼ぶ必要もないのではないだろうか。それは自分の内にあって天上界の最高神にもつながるもの、すなわち「内なる神性」、「内在せる叡智」、内村鑑三の言葉を再度引用すれば、「己の要求と上よりの啓示を相合致せし所の真理」とでも呼ぶべきものかもしれない。

¹⁶ 『ヨブ記の答え』、みすず書房、p.102

4 ヨブの見神

ヨブの「贖い主」を希求する心情が、最高調に高まったときに、それは見神への祈念・確信に昇華される。実際に、贖い主の存在を確信した直後に、口を継いでヨブは「かくも打たれたわが皮を去り、わが肉を離れてわたしは神を見るだろう」と語っている。それは単なる願望を超えて、不動の信念となり、すでに「確定事項」であるかのように敢然として言い放つのである。その後もヨブは、自らの無罪を三友に主張し、我が身の不幸を嘆じ、あくまで神へと返答を求めはするが、ここで悟達せられた「贖い主の信念」はもはや潰え去ることはないのである。

その不動の信念に呼応して、彼の祈念は、終に天に届けられる。暴風に乗って、神が彼の眼前に現れるのである。いかに 19 章で得られた宗教上の悟達が、偉大なものであれ、現実には神と相まみえる神秘体験は、絶対的な神威に満ちて、圧倒的であり、やはりヨブ記の物語の最大にして最終のクライマックスであることは間違いないまい。

この無知の言葉をもって
経綸（はかりごと）を暗くするものは誰か、
君は男らしく腰に帯せよ。
わたしが君に聞くから、私に応えよ(第 38 章 2, 3)。

これはまことに意想外な展開であろう。ヨブとしては、神の側から自分の身に降りかかった理不尽極まる不幸への納得のいく合理的な釈明を求めているのに、神は、その点において一言も説明せず、また一切悪びれる風もなく、圧倒的な威儀をもってヨブに問いただすのである。

「神と相まみえるというのは、こういうことなのか」とヨブはその威に打たれて、間接的に神に対していただいていた人間的な、傲然なる気負いは一瞬にして消し飛んだに違いない。逆にここで神がヨブに対して人間的な理解に媚びるような釈明をしていたならば、ヨブの沸点に達した理不尽さへの不満や怒りは暴発していたかもしれない。

地の基いをわたしがすえたとき君はどこにいたか。
語れ、君がそんなに利巧ならば。
誰が地の量り方を決めたのか。—君が知っているなら。
誰が地の上に量りなわをはったのか（同章 4—5）。

この章句に続いて、神は、大演説をぶち、天地創造の御業に、また多種多様な動植物の創造にヨブがどのようにかかわったかを一つ一つ問い糺しているのである。さらに第 40 章にいたっては、神は、ヨブの内なる憤懣を見透かして示すように、厳かに

語る。

君はわたしの公義を否定し
わたしを非として、自分を義とするのか。
君は神のような腕を持つというのか、
神のようにその声をとどろかすことができるか。
君は威厳と尊厳をもって自分を飾り
栄光と光輝をもって装うがよい。
君の燃える怒りをあらわし、
高ぶるものを見たらこれをかがませ
悪しき者を立ち所に打ち倒せ、
彼らを塵の中に一瞬に埋めてしまえ、
その身柄を獄舎に閉じ込めよ。
そうすればわたしも君をほめたたえよう、
君の右の手が君を救ったのだから（第40章8—14）

天地の経綸を司る正義の担い手としての無尽蔵の威神力を示し、「君にも同じことができるか」と問い糺すのである。無論、被造物であるヨブにそのようなことができるはずはなく、神の尋問に答えることもできるはずはない。ヨブは、神の威力に比して己の卑小さを思い知らされ、しおらしく答える。

御覧ください、私はいと卑しき者です、
何とってあなたにお答えできましょう。
我が手を口に当てるばかりです。
一度言いましたがわたしはくり返しません。
二度言ったとしてもこれ以上申しません（同章3—5）。

この時ヨブの胸中にわいた思いは、いかなるものであったろうか。それは、神に対して直接相まみえる前に自らが発していた理不尽さに対する不平不満の数々を恥じる思いであったのではないか。それは神の圧倒的臨在を感じえなかったゆえの人間的驕慢にすぎなかったと心底思っていたのではないだろうか。

さらに神は、人間心の想像をはるかに凌駕するスケールで、霊獣リヴァイアサン（鰐）とビヒモス（河馬）の破壊的な猛威とそれをしも押しとどめる神の超絶的な威力について触れ、この天地万物を創造し、司る神の絶大無比なる権能を高らかに宣揚したときに、ヨブは己の非力を恥じ入り、心よりの恭順の意を示して、無知ゆえの我が身の不遜を誠心誠意悔い改める。

わたしにわかりました。
あなたは何事もおできになる方、
どんな策をも実行できる方であることが。
それなのに私はわかりもしないこと、
知りもしない不思議について語ったことになります。

私はあなたのことを耳で聞いていましたが、
今や私の眼があなたを見たのです。
それゆえに私は自分を否定し、塵灰の中で悔い改めます（第 42 章 2—6）

これは、ヨブの心からの疑念に対する神からの十全たる解答になっているであろうか。ヨブは、本当にこの神の態度で納得したのであるだろうか。その通りであると思う。このヨブの恭順と悔い改めは、神の怒りを恐れて表面的にのみ取り繕ったものではなく、腹の底からの真率なる信仰告白であり、創造主への絶対帰依の表明である。神への恐れではなく、その神威に対しておのずからわいてくる畏まる心、神への畏れが湧いてきたのである。

それでは、ヨブの積もり積もった自己の義しさ、無実潔白を神に届けたいと祈念したその念いは聞き届けられたのか。ヨブは、その点を心底了解したのであるだろうか。無論、近代的合理性の立場からすれば、神は、ヨブの必死の問いに対して何一つ解答していない。ひたすら神威の偉大なるを語るのみで、ヨブの無実を雪辱することも、慰労することも一切していない。

それでもヨブは、神に対してすべてを一瞬にして了解したのである。間接的な伝聞で知っていた神、「耳で聞いていた神」ではなく、直接に「私の眼であなたを見た」ことが、すなわち「ヨブへの答え」になったのである。見神は、信仰ある者にとっては、それ自体が究極目的であり、それ以上の価値ある目的はこの地上には存在しない。

神と直接相まみえる前においては、この世的に生きやすく生きんとする現世への一抹の未練が残っていた。見神によってその最後の未練が木っ端みじんに粉碎されたのである。言い換えると、自我が完全に打ち砕かれ、現世への執着が完全に消え去ったときに、まったく神への畏れの念から発する「内在する智慧」が顕現したといって間違いないだろう。「見よ、主を畏れることは智慧であり、悪を避けることは悟りである。」（第 28 章 28）

ヨブは、神と対面したときに、その隠されたる智慧が一举に湧出し、一瞬にして悟ったに違いない。「神は、自分の無念も無実もすべてご存知である。それでも自分にすさまじい苦難が襲ってくるのであれば、そこには自分にはあずかり知らぬ神慮があるはずだ。ならば、賢しらなる人間心を棄ててひたすらに神の示される道に付き従い、歩んでいこう」とそう誓ったはずである。

ヨブ記最大の秘密は、この神秘の見神体験における神の側からの「解答なき解答」に秘せられた神慮の贈り物である。ヨブは、その奇跡の瞬間に天地創造の御業、人知をはるかに超えたる造化の絶妙を一刹那垣間見たはずである。神を耳で聞くのと見るのでは大違い。

そこにはリアリティーの絶対的な差異がある。実際にその天上的な神威を目の当たりにしたとき、彼の内面には激震が走っただろう。この三次元世界に現象するすべてのこと、この世の栄耀栄華も、神の世界創造の偉業に比べれば、全くとるにとらない児戯に思えたのではないだろうか。

そこには、神と人間の間の圧倒的な認識力の格差がある。神から見れば、人間の一世一代の重大事も、喪失耐えがたき人生の歓楽も性愛の喜びも社会的な名声も友人や家族間の団欒の幸福も、つかの間の蜃気楼、幻影にすぎない。それは、ちょうど人間からみて蟻塚の蟻たちが必至に甘い餌を運んでいるに姿に等しいものに映るだろう。

ヨブが得たのは、この天来神妙なる神のまなざし、智慧の宝である。この天上の宝は、この地上をいかに探したとしても決して見つけることはできない。「智慧はどこで見いだし、悟りのある場所はどこなのか」(第28章1, 7, 12)

それは、この世的な人生を生きやすく生きていかにとする、人間的な自我が崩壊した先にしか見えない。多少人生の苦難に見舞われたとしても、なまじこの世的な未練が残っているとすれば、そこに恋々としがみつки、全智全能なる神の御示しになる新天地に勇躍して踏み出すことができないだろう。それは神への絶対帰依の境地であり、この世的な未練を断ち切った純粹信仰の至境である。

すべてを失ったときに、すべてを得られる。ヨブへの試練は、その徹底性ゆえに神からの最高の宝物となりえたのである。神が下手な釈明をしなかった理由もそこにある。その値打ちに比べれば、神とサタンにおける神の勝利ですら、微々たるものになるのではないだろうか。

5 結びに代えて—ヨブ記の終局（ハッピーエンド）の意味

ヨブ記のエピローグは、劇的なハッピーエンドで終わっている。神が奪った財産は、倍にしてヨブに還ってくる。亡くなった10人の子女の代わりに、より優れた子女に恵まれる。娘は三人とも類まれなる美女となる。また、失われた名誉は、完全に回復され、ヨブへの不当な断罪を行った三友は、神の厳しい叱責を受け、ヨブのために罪滅ぼしの燔祭を命じられる。ヨブは神の命により彼らのために執り成しの祈りをささげる。彼は、140歳にいたるまで幸福な人生を生き、天寿を全うした（ヨブ記終曲、第42章7-17）

まるで絵にかいたようなハッピーエンドの結末である。これは、真に信仰あるものは、地上的な幸福においても報われるという現世利益的な民衆教化のための方便であろうか。あるいは、前述したとおり、ヨブは見神の神秘体験において全き霊的な幸福を得ているのだから、このようなこの世的な幸福の執り成しは本来余計であるとの見方であろう。「この

最後の記事はヨブ記の記者には必要であったけれども、ヨブには必要ありませんでした¹⁷。」

しかし、私は、このヨブ記の結末には、それ相応の大きな意義があると信じる。

ヨブは、すでに神を見て、神を畏れ、この地上への執着をすべて断ち切ったのであるから、逆にこの世的な幸福に恵まれても、それを我が善行ゆえの功績と奢る気持ちは微塵もなく、ただ神よりの恩恵として感謝の気持ちで受け止めるであろう。ゆえにそれを私物化することなく、この大試練に襲われる以前よりも増して我が富を天下万民の幸福と安寧のために使い切ることであろう。

神よりすれば、この世的幸福や有り余る富は、それを汲々として求め、私物化する者ではなく、むしろ無私なる奉仕の心の持ち主にこそ恵みたいと思われるのだろう。そのような幸福や富は、世の中に循環し、この世の聖なる発展繁栄にもつながるからである。

全知全能の創造主は、その絶対的な叡智と絶対的な力ゆえに、天上的な世界に責任をもつのみならず、この地上にも神の国としてのユートピアを実現せんと願っておられるのではないだろうか。

無論この世の幸福と霊的な使命のどちらかを優先するかと言えば、迷わず後者を選ぶのが、真実の信仰者の道であろう。しかし、いたづらに霊的幸福に固執して、神より授かりしこの世の恩恵を拒む清貧の徒も、やはりもう一つの極端に陥っていないだろうか。

素直に神の恩恵を感謝をもって受け止め、それを世のため人のために還元せんとする私心なき豊かさも神の国へと参入する正道であると信じる次第である。

参考文献

- 『ヨブ記』、関根正雄訳、岩波書店、1979
『ヨブ記講演』、内村鑑三著、岩波書店、2014
『内村鑑三聖書注解全集 第四巻』、山本泰次郎編、教文館、1961
『ヨブ記註解Ⅱ』、浅野順一著、創文社、1968
『ヨブ記の研究』、同上、創文社、1962
『神と人間の書—ヨブ記の研究（上）（下）』、ロバート・ゴルディス著、船水衛司訳、教文館、1977-1979
『ヨブへの答え』C.G ユング著、林道義訳、みすず書房、1988
『なぜ私だけが苦しむのか—現代のヨブ記』、H.S.クシュナー著、斎藤武訳、岩波書店、2008
『苦難に対する態度—苦難の人ヨブを中心として』、賀川豊彦著、慧文社、2015
『ヨブ記講話』、北森嘉蔵著、教文館、2006
『トマス・アキナス『ヨブ記註解』』、保井亮人訳、知泉書房、2016
『ヨブ記・詩編 未発表聖書講義』、矢内原忠雄著、新地書房、1986

¹⁷ 『内村鑑三聖書注解全集、第四巻』、教文館、1961年、p.28

『聖書 新共同訳』三省堂、1987, 1988